

資料としては、当科に来院した混合歯列期前歯部反対咬合者97名のうち、歯冠修復処置が施されているものを含め全ての乳臼歯がほぼ健全な状態に保たれている37症例を健全群、乳臼歯の歯冠崩壊または早期喪失を認める60症例を早期喪失群とに分け、その頭部X線規格写真を分析し、統計学的に処理し検討した。

結果として、反対咬合者において乳臼歯の早期喪失の有無による大きな成長パターンの違いがないことがわかり、乳臼歯の早期喪失は第一大臼歯の近心移動を招き、その垂直的水平的距離の減少が下顎に比べ上顎第一大臼歯でより大きいことがわかった。これに伴う下顎の変化は、skeletal pattern では顎角の開大と顎角部および骨体部での骨の幅の減少を生じながら overclosure していること、denture pattern では、歯性の補償による下顎前歯の舌側傾斜が生じていることがわかった。そのため、下顎骨が前方位をとり上下顎関係が悪くなり、下顔面高の減少を招くことが唆された。

質 問 五十嵐清治 (小児歯科)

1. 乳歯の早期喪失は $\frac{E1E}{E1E}$ のことですか。
2. 乳歯の早期喪失が反対咬合を若起するのは $\frac{616}{616}$ の近心移動により咬合高径が変化し、下顎が前方位をとると解釈して良いのか。

回 答 横山一徳 (矯正)

1. 選択期準は、最低限上下または各々で両側第1乳臼歯の早期喪失があるものとししました。
2. 健全群と早期喪失群との比較ではそのような結果が得られた。

質 問 金子昌幸 (歯科放射線)

1. 乳臼歯の脱落からどの位の後に反対咬合となるか？
2. 第1大臼歯の発育段階は関係がないか？

回 答 横山一徳 (矯正)

1. この件についてはくわしい資料が得られなく、くわしくは不明である。
2. 今回の報告は乳臼歯の早期喪失がどう顎態に影響するかというもので、第1大臼歯の発育段階についてはくわしい検討を行っていない。

10. 放射線学教育に関する歯学部学生の意識調査の結果について

大西 隆, 菊地文利, 金子昌幸
(歯科放射線)

本邦における歯学部の総部数は29学部で、毎年3,000名前後の新しい歯科医師が誕生していることになるが、歯学部の増設に伴ない学生の質も極めて変化に富み、従来の大学教育と同一方法で教育を行うことの難しさが生じている。

今回我々は現在の歯学部における大学教育とはどうあるべきかという問題に対して、何らかの解答を出すために、歯学部の学生が講義や試験に対しどのような考えを持っているかについてアンケート調査を行ない、興味のある結果が得られたので報告した。

アンケート調査の対象は本学歯学部の第4学年の学生121名で、回答は無記名とし、できるだけ本音が述べられる形式とした。調査項目は9項目で、①教育方法、②試験の出題形式、③試験の出題数、④採点方法、⑤出題数と合格者数の変化、⑥講義中の私語、⑦カンニング防止方法、⑧試験の回数、⑨講義や教育に対する基本姿勢に

関し、賛成か反対か、あるいは意見を述べる形式とした。その結果、無記名であることから不真面目な回答が多くなると考えたが、得られた回答は極めて真面目で学生の教育に対する意識、関心の高さがうかがえた。そして平均的な学生に合わせた教育が望ましく、大学生としての自主性に基づいた教育を望む傾向にあることが判名した。しかし講義中の私語を禁止することに賛成したり、自主性を重視した講義を望む反面、再々試験を行なってほしいなどの多少のあまえも見られた。

質 問 荊木裕司 (保存II)

設問の4で「試験問題を増やしたらどうか」というのがありましたが「減らしたらどうか」という設問は、なされなかったのですか。

回 答 大西 隆 (歯科放射線)

「減らす」との設問はなかったが、それに関する理由を記入させた。